



地域の医療を守るために

奈井江町長
奈井江町立国保病院 開設者
北 良 治

このたび北海道医師会より機関誌「北海道医報」への執筆依頼をいただき、地方自治体の長として、また北海道医療対策協議会の委員として、これからの地域医療をどう守り取り組むべきか、日頃思っていることを述べさせていただきます。

◎地方における地域医療の現状

地域医療を取り巻く状況は依然として厳しく、特に地方（過疎地域等）の病院は、医師や看護師が思うように確保できず、都市部との地域偏在がさらに進み住民への安心した医療提供に大きな影響が出ています。

これからますます高齢化の波が押し寄せてくるなか、地域医療体制の充実がまちづくりの根幹をなす上で、「地域全体でどう医療を守るか」が喫緊の課題であります。

また、昨年の診療報酬改定では0.004%とわずかながらプラス改定となりましたが、救急等の急性期、高度医療を担う大病院、中核病院に対するメリットはあったものの、慢性期、療養期医療を担う中小病院にはプラス要因がほとんどなく、道内各地で医療を守る中小規模の自治体病院は、医師、看護師不足の問題とともに経営上の問題がそのままの置き去りとなっています。

◎地元開業医との病診連携

奈井江町では、平成6年から地元開業医師と町立病院医師との連携のもと、町立病院の病床の一部を開業医師に開放し、かかりつけ医が入院紹介とともに継続して診療にあたる体制をとっています。

住民にとって、なじみの深いかかりつけ医に引き続き診療してもらえることは、医療に対する安心感とともに信頼感にもつながっており、これからの地域医療を守っていくための大変重要な施策のひとつではないかと思えます。

合わせて、病床の開放のみならず町立病院の高度医療機器や検査施設の共同利用も進めており、さらには医療と介護の連携による町内老人保健施設や特別養護老人ホーム入所者に対してもかかりつけ医が診療にあたっています。

同じ町内の医師同士が連携を深めながら、相互に地域医療を守っていくことがひとつの手がかりになるのではないかと思います。

その意味でも、かかりつけ医としての開業医の先

生方の理解と協力をお願いします。

◎地域拠点病院との連携

今まさに、ひとつの病院が医療すべてを完結することが困難な時代となりました。

そこで、それぞれの地域の拠点病院との医療連携により、病院の特色、役割を明確にしながら、地域全体で医療を守っていくことがこれからとても重要となります。

奈井江町の場合、隣町の砂川市に地域センター病院である市立病院が、車で約15分程度の近い距離にあり、住民にとっても大変ありがたく心強い限りであります。

このようななか、平成17年より病院間の医療連携協定を結び、8項目にわたり取り組むこととしています。

協定項目のひとつとして、連携を推進していくうえで医療情報の共有が重要であることから、情報ネットワークのIT化を掲げており、砂川市立病院はすでに電子カルテシステムが導入されていますが、現在奈井江町立病院としてもオーダーリングシステムの整備とともに最終的に電子カルテシステム導入を目指しており、将来的にシステム連動したなかで急性期医療と慢性期、療養期医療との円滑な流れを築き、両病院の役割を明確にしながら、地域で安心した医療の提供を図っていく考えです。

◎医師不足対策

地方における医師不足の問題は相変わらず深刻な状況にあります。北海道の施策として医育大学の地域枠の設定と定員数の増に取り組んでおり、即効性はありませんが将来的に地域医療を担っていただける医師が数多く存在することを期待しているところです。しかしながら新医師臨床研修制度の導入により大学医局からの医師派遣がだんだん厳しくなり、特に自治体病院の大きな役割としての救急医療体制がうまく機能できない状況が続いています。

現行の研修制度のなかで、地域医療に関するカリキュラムが導入されたことは評価していますが、より地域医療に対する意識や意欲を高めていくための研修体制のあり方を再構築できないかと思えます。たとえば過疎やへき地の自治体病院等への一定期間の研修義務化や専門医のみならず総合医の育成を積極的に進めながら、プライマリケアに興味をもってもらうこと、またこれからの高齢社会に対する高齢者医療（療養型医療）を担っていく医師の育成にも力を注ぎながら、地域の医師不足を少しでも解消する手段として取り組んでみてはどうでしょうか。

◎これからの取り組み

住民にとって住み慣れた地域で安心して暮らせる第一の願いは、「身近で安心して医療を受けられること」です。

今まさに地域医療が崩壊の危機に直面し、医師や看護師不足による地域偏在の問題、病院経営の圧迫等さまざまな課題をどう捉え解決していくか、行政、医療機関、医師会、大学等が今後さらに一体となって取り組んでいかなければなりません。

医育大学の地域枠、定員増により、将来の見通しとして地域医療を志す医師が一人でも多く存在することを期待するところですが、そのためにも臨床研修制度によるプライマリケアや総合医の重要性を高

く位置づけていただきたい。

また、これからの高齢社会に対応した慢性期、療養期医療はとて重要であります。このことを担う中小病院にとって診療報酬上ほとんど評価されていない状況にあります。

今後の診療報酬改定のなかで、ぜひ療養期医療、プライマリケアに対する評価を検討願います。

住民にとって、どこに住んでも安心した医療が受けられることを願いながら……



地域医療を支える 環境づくりを 目指す活動を

羽幌町
地域医療を守る会「折り鶴」 会長
有澤 護

「今日で〇〇先生いなくなるね」「次の先生は長くいてくれるかな」「〇〇科があるといいね」…と待合室での患者同士の会話。

羽幌町は留萌管内中心部に位置し、天売島、焼尻島を有する人口7,900人弱、65歳以上人口は2,800人を超え、高齢化率は35.5%の町です。現在、町の医療機関は1つの個人病院と留萌中北部地域の2次医療を担う道立羽幌病院があり、島にはそれぞれ道立診療所があります。

道立羽幌病院は、平成17年に改築され、当時診療科は11科、常勤の固定医11人、札・旭医大等から派遣医師の応援を得て地域センター病院として住民の治療と健康を守っておりました。新たな臨床制度の始まりと都会志向による医師の偏在から当病院の常勤医師も1人、2人と不在になり、「〇〇科、〇〇科休診」が続き、現在では内科、外科を5人の常勤の医師が、それ以外の診療科は大学病院、近隣病院の医師の応援を得て、中北部のセンター病院としての役割に貢献をいただいております。

この地域も高齢者の割合が高くなる一方で、病気を抱えている、病気にかかり易い環境にあります。特に、離島には500人以上が生活しており、冬季間は唯一の交通機関であるフェリーの欠航が多く不安を抱きながらの日常であり、安心した生活を送るためにも医師の在住を欠くことはできません。

「先生に長くいてもらうにはどうしたらいいのか」「診療しやすい環境は」「地域医療を守るには」…と地域医療が抱える問題を住民全体の問題として考え、取り組みを始めました。医師、スタッフの皆さんが地域に愛着を持って診療に専念ができ、交流を通して理解を深めることを目標に、平成23年3月、町の商工会が中心となり、産業団体、福祉団体、婦

人団体、青年団体などが連携して「地域の医療を守る・折り鶴の会」を設立いたしました。

折り鶴の会は、

- ①医師、病院スタッフとの交流
 - ②医師、スタッフが診療しやすい環境づくりへの支援
 - ③会報の発行
- などを活動の中心としております。

会はまだ2年足らずの活動ですが、これまで医師、スタッフの歓迎会、夏の交流会、医療関係者との座談会、会報の発行、病院内に感謝の掲示板設置などを通じて地域の理解を深める活動を行っております。また町も医師の固定化、看護師不足の解消に向けた支援制度や住環境の充実、ドクターヘリポート設置など医療環境の充実に取り組んでおります。

「熊熊通信」に掲載されております医療現場の問題や医師の生活環境、地域医療への想いなど、医師の立場からの報告として医療を取り巻く問題などを知ることができ、私たちが進める活動に対する道標ともなっております。地方病院の勤務は「幅広い病例の経験」「住民、患者からの信頼感の充実」など貴重な経験が得られますが、反面、「業務の多忙」「交代医師の不足」「他病院とのネットワーク・連携の充実」など医師、スタッフの勤務環境の課題もあり改善も必要です。

地域の病院、診療所に勤務する医師は、一人ですさまざまな対応をしなければならず、幅広い知識と専門性が求められとても多忙です。医学が進歩する時代、病院内での研修、研究を重ねていくにはゆとりのない環境と思われれます。医師が医療技術、日々の進歩に研さんを重ねるためには一定期間に都市の病院や大学病院等での研修を義務化し、その間の交代医師を配置できる仕組みを構築すべきです。また、臨床研修を終えた医師は、数年間の地方勤務の義務化を制度的に確立をすることも必要なものではないかと考えます。

折り鶴の会では、これからも地域の医療を守り、地域においても安心しての医療が受けられ、医師・スタッフの皆さんが地域住民の健康と医療活動に専念していただくことができる環境づくりを目指しながら、これからも活動を拡大、充実をしていくこととしております。